

カトリック六甲教会 教会報

2014

6

No.510

年次報告会へご参加を

小教区評議会議長 飯塚和彦

6月15日の10時のミサの後、小教区評議会の「年次報告会」が開かれます。

六甲教会とは何でしょう。誰のものでしょう。大阪大司教の教会？イエズス会の教会？キリストの教会？そうです。教会＝共同体は、あなたの教会、わたしたちの教会なのです。そのあなたの教会が今どんな状態にあるのか、何をしているか一緒に考えてみませんか。

かつての信徒総会には決定権が認められませんでした。現在では小教区評議会が六甲教会の決定機関です。あなたとその評議会とのつながりを確認する場が年次報告会なのです。あなたが所属する教会＝六甲教会共同体との関わり方を祈りのうちに考えて見ませんか。

今年は、上記の時間にイグナチオホールにて、次のようなことが報告されます。

- | | | |
|----|-----------------------|-----------------|
| 内容 | 1. 新主任司祭から挨拶。 | 2. この一年を振り返って。 |
| | 3. 教会 会計報告。 | 4. 評議員・地区会役員紹介。 |
| | 5. 組織図(教会しおり)についての説明。 | 6. 質疑応答 |



ナルドの花たより

2014年4月27日「神のいつくしみの主日」に、バチカン聖ペトロ大聖堂広場で教皇フランシスコによって、ヨハネ23世とヨハネ・パウロ2世の列聖式が執り行われました。

「神の国は人々が互いに愛すること、ゆるすこと、仕えることをゆっくりと学ぶにつれて徐々に成長します。イエスは愛のおきてに焦点を合わせ、すべての律法を統合され、弟子たちから離れる前に、『新しいおきて』をお与えになります。『わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。』世界に向けられたイエスの愛は、人類のためにご自分のいのちを与えるという最高の表現のうちに見いだされます。それは世に対する神の愛を示すものです。ですから神の国の本質は、全人類における相互の、そして神との交わりのひとつなのです。

神の国は、個人、社会、そして世界、つまりすべての人にかかわっています。神の国のために働くことは、人間の歴史の中に現存し、この歴史を変える神の活動を認め促進することを意味しています。神の国を建設することは、あらゆるかたちの悪から解放するように働くことを意味しています。つまり神の国とは、神の救いの計画を完全に示し、実現することなのです。

イエスを死からよみがえらせることによって、神は死に打ち勝ち、神はイエスにおいて決定的に神の国を始められました。」
(教皇ヨハネ・パウロ二世回勅「救い主の使命」より)

「2014年第1回小教区評議会」議事録

(1) 日 時： 2014年05月11日(日) 11:15 ~ 12:55

(2) 場 所： 第4会議室

(3) 出席者： 六甲教会小教区評議会評議員 高山助任司祭 教会事務室

(4) 議 題：

■ 報告事項

- ① 「主任司祭から」挨拶 (Fr. アルフレド)
- ② 「小教区評議会年次報告会」について (飯塚)
- ③ 「5月度神戸地区評議会」報告
- ④ 「地区役員会からの報告」
- ⑤ 「13年度決算と14年度予算報告」
- ⑥ 「聖堂屋根補修について」 6月初旬に終了予定。
- ⑦ 「各専門部会・各信徒会からの連絡と報告」

■ 協議事項

- ① 2015年の神戸地区大会 役員のパ遣について
- ② 聖歌集のワゴンをロビーに置くことについて6月15日 10時ミサ後に小教区評議会年次報告会があります。

※ 次回(第2回)評議会は7月13日です。



神父様を送る 神父様を迎える

カトリック六甲教会ではこの4月、主任と助任の司祭を同時に交代いたしました。松村神父・片柳神父 お二人には色々とお世話になりました。簡単ではありますが感謝の言葉を申し上げたいと思います。

松村主任司祭は5年前に、山口ザビエル教会の主任司祭から転任されてきました。手術直後に新しい任地の六甲教会へこられた(2ヶ月遅れて)にもかかわらず、またその後も毎月1回の検診を受け続けるというコンディションの中で、それを垣間見せることも無く、精力的に働いてこられました。主日のミサを司式された後、すばやく祭衣を着替えてから玄関へ出てミサの参加者と笑顔で挨拶や会話を交わされておられました。高齢者や病者への互いの見守りや配慮しあえる教会を目指して、地区会作りを進められました。この地区会は毎週の掃除や教会行事などを担っていく中で、家族ぐるみの、また地域中心の横のつながりを強くしていきました。そしてさらに活力のある確かな運動体へと成長しつつあります。また行事の予定や教会の仕組みをわかりやすく説明する目的での「教会のしおり」の発行と配布も神父さまの下で定着してきました。日曜日の説教や教会報などを通して、祈りの実践を勧め、信徒使徒職についての自覚を促すなど啓蒙にも心がけてこられました。その他に教会の財務など多くの足跡を残されてはいますが、まだまださまざまな取り組みの途上にあるのに突然の転任ということで、心を残されての長崎に移られるのだと思われます。モモちゃんを街を散歩される姿はもう目撃されません。納涼の夕べで聴いたあの豊かな歌唱力に私たちが触れることも無くなります。長崎立山修道院(黙想の家)で、六甲の皆様をお待ちしていますとのことです。新天地でのご活躍お祈りいたします。

片柳神父さまは6年間助任司祭として働いていただきました、「ヤギー」と子供たちから親しまれ、青年たちに山歩きを誘われるなどよくいただきました。子供たちは着実に成長してますます立派な若者になって行きます。神父さまのごミサでは、迫力ある声での聖歌や説教に、私たち信徒は圧倒されるばかりでした。ヤギー神父誕生に大きな力を果たした「マザー・テレサ」についてのお話されるときの眼の輝きは印象深いものでした。大阪教区の神戸地区長をされている時は、東日本大震災の被災地を訪れ、特に福島については「ふっこう(福島・神戸)のかけはし」を実現させるための大きな力となられました。神父さまのことは写真とインターネットを離して語ることはできません。祈りの言葉を添えたカードを何度か頂戴しました。教会入り口の掲示板に張られた神父撮影の写真ポスターに道行く人が目を止める様子を見かけました。その写真を撮るための被写体＝花や鳥・虫たちを追う(待つ)意欲には執念を感じさせられるほどです。若い人に声をかけて呼びかけるにはとブログを開設し、さらに双方向の対話を求めてツイッター(フォロワーは数千人と伺っています)やフェイスブックなど SNS を駆使して「デジタル大陸」での宣教を進めておられます。新教皇の情報も SNS を通して多くの発信をされてきました。このあとは宇部・小野田の3つの教会と3つの幼稚園の間を飛び回られることでアナログ的な機動力も必要となります。まだまだ若い神父さまですので、ますますご活躍下さい。



アルフレド神父さまはアルゼンチンからやってこられたイエズス会宣教師です。「日本で働きたかった」といわれる教皇フランシスコが、管区長・司教・枢機卿になられる前に神学院の院長でおられるときに、その指導を受けられました。これまで東京四谷のイグナチオ教会で長く働かれておりました。関西は初めてなので色々教えて下さいと言われていました。しっかりした信仰を基にしたパワーのある、しかし優しく信頼される神父さまとお聞きしております。

司祭巻頭言がなくなるため、当面教会報全体の紙面づくりにも試行錯誤を重ねていくこととなります。月によって掲載内容にばらつきのあることが想定されますが、より良い紙面づくりのため、どうぞご理解のほどよろしくお願い申し上げます。また、毎月の教会報を読んでの率直なご意見、教会報紙面に関する様々なアイデアなどございましたら、広報部までお寄せください。

「みんなの広場」原稿募集！

上記の趣旨をふまえ、「みんなの広場」にみなさまからの原稿を募集いたします。信仰メッセージに限りません。日々の喜び・悲しみ・感謝、暮らしの中での気づき等、数行でけっこうです。原稿を頂戴しました月に、到着順、洗礼名（ご希望の場合はフルネーム）で掲載いたします。

締切： 毎月15日

提出先： ①教会事務受付

②教会 Fax078-851-9023

③E-mail: renraku@rokko-catholic.jp

※ ご寄稿頂いた翌月号に掲載予定ですが、紙面・編集の都合により、その月に掲載できない場合がございます。ご了承ください。

※ 洗礼名で掲載いたしますが、後日広報部からご連絡させて頂く必要がおこった時のため、提出原稿には必ず氏名・連絡先をご記入ください。



これまで通り、行事に関する報告・お知らせ・感想も随時受け付けております。特に行事に参加された方の感想をお待ちしております。こちらも数行でけっこうです。行事主催者の報告だけではなく、参加者の感想をできるだけ多く掲載したいと思います。

また、シリーズ「忘れないで！東日本の被災地から」への原稿も募集しています。被災地でのボランティア活動に限らず、遠く神戸からの支援活動や被災地への思い等をお寄せください。

教会報はみなさまのご寄稿なしには成り立ちません。教会報の紙上がもうひとつの私たちの共同体となりますよう、みなさまのご協力どうぞよろしくお願い致します。 広報部一同

~~~~~

## 《 図書室からのお知らせ 》 2014年5月に入った図書から

### 2014年5月に入った図書から

☆ もう一人のわたし —— C.J.エンツラー著 庄司篤訳 いつくしみセンター

「My Other Self」パウロの回心のとき、イエスは「なぜわたしを迫害するのか」と言われたように、パウロが迫害したのは「もう一人のわたし」である信者でした。キリストが読者に語りかけてくるかのように、キリストとの友情のうちに生き、キリストと一致して生活するようにといざなう信仰の書。 教会の信者さんから頂きました。

☆ 体験的「うつ」克服のヒント —— イシドロ・リバス著 フリープレス

絶望のさなかに希望がある。 おち込み屋さんへ、キリスト教からのメッセージ。

長年にわたって、自身が「うつ」を体験し、苦しみ格闘した日々の中で、イエスのメッセージに希望の光を見た。癒しのプロセスを心理学と信仰の関係に焦点を当てながら語る。「うつ」は敵から友となり、恵みへと昇華する。「がんばらないで、あきらめない！」





## みんなの広場

### 「わたしもあなたがたを遣わす」

間もなく聖霊降臨の祝日を迎えます。その中で、聖霊を注いでいただく恵みを願い、あるいは聖霊が注がれていることを思い起こします。聖霊降臨の日の福音（ヨハネ 20:19-23）には「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」とあります。遣わされた私たちはどこに遣わされたのでしょうか？なすべきことは何でしょうか？そのために与えられた聖霊はどう働いてくださるのでしょうか？このような疑問はたくさん浮かんできます。私たち、一人ひとり、神との対話の中でその答えを求めています。

しかし、個人的なことだけではなく、教会としての派遣もあると思います。

教皇様が教会全体に呼びかけておられることのひとつは、外に出かけて、端の、必要などころに向かって福音をお届けすることです。

わたしたちにとっての「外」とか「端」とかはどこにあるのでしょうか？

「外」とは、必ずしも空間的なことではなく、「わたし」という「内」から出ていくことも意味します。「わたし」が必要とすることではなく、外にあるニードに気づき、それに向かっていくことは大切です。社会的弱者に手を差し伸べることはいうまでもありませんが、求められているのはそれだけではありません。福音宣教は教会の中ではなく、「外」で行われるものだと考える必要があります。わたしたち全員は宣教者で、わたしたちの宣教の場は職場だったり、近所だったり、場合によって家庭だったりします。そこで私たちの信仰の生き方が問われます。生き活きとしていて、積極的で、安心と喜びに満ちた生活が福音を伝える第一の手段だと考えます。

「端」と考えると、世代の両端に重点を置くことは大事だと思います。子どもは教会の未来を担っていますし、高齢の信仰の先輩たちは知恵と記憶の恵みをわたしたちに継がせてくださいます。子どもにしても、高齢者にしても、間の世代の助けを必要としています。重荷になったり、悩みのもとになったりしますが、私たちの責任でも喜びであります。いただいたものに対して感謝をし、途切れることなく信仰が伝わっていく信仰者の責任を果たしていくことができることは聖霊の賜物によるものでしょう。

今年の聖霊降臨の日に「私たちの上に聖霊を注いでください。私たちを遣わしてください」と祈りながら、「外」へ向かうこころの準備ができますように。(アルフレド)

### 妬ましいこと

新旧主任司祭の歓送迎会で配られた1枚の“チラシ”、「立山黙想の家」のチラシは遣わされた所に専念する、六甲に専念された松村神父様の「面目躍如」であった。

僕が黙想会を経験した最初は、夏休みの行事であった六中生の黙想会に六中生ではない僕も呼ばれたことであった。ある年のこの黙想会で痛ましい事故が生じたことがあった。子供を喪った悲しみの中で「責任はわたしたちにある」と警察の追求から指導者であったライフ神父を守り抜いたの

はその両親であった。

戦後暫くしたある年、聖週間の黙想会に誘われた。聖週間、御復活の典礼があるからと渋っていたら放っておけといわれた。それで長束へ行った。黙想「会」だったが、手空きの修練士が同席するだけで、僕一人でフィステル神父様の講話を聴くという贅沢なことになった。講話を聴いたら後は自分で考えろと言う。講話の内容は御受難、御死去、御復活だった。黙想の終わり、御復活祭のミサは今も覚えている。クリスマスは親しかったが御復活はあまり親しくはなかったが、このときから聖週間御復活がクリスマスよりも身近になった。

僕が青年会員だった時代。主任司祭ブラウン神父様は三日間の黙想会に熱心であった。8月には男子青年会と女子青年会にはそれぞれ教会の外に、外泊が困難な壮年会と婦人会には通いで三日間の黙想会を催された。三日間の黙想会の内容は霊操の「原理と基礎」で、日常の暮らしに心を奪われる信徒が、「原理と基礎」に立ち返るためであったろう。8月は特に女子の修道会は黙想を行う。上智や長束の神父たちは多忙であった。その中で指導者を確保することは、ブラウン神父にも容易ではなかったことを後に知った。

今は黙想会があっても参加は困難になった。黙想会でなくても黙想はできる。誤りではない。それでも三日間、日頃の生活の場を離れ沈黙の中に過ごす黙想会は全くの別物である。練達の司牧者である松村神父様の黙想指導に参加できる人たちを妬ましく思う。(ヨハネ 三好 榮之助)

## 祈りのちから

今年の復活徹夜祭、カトリック垂水教会で母が受洗しました。

今までキリスト教に対してそれほど興味を示さなかった母ですが、昨年縁あって愛徳姉妹会のシスターのもとで聖書の勉強を始め、日曜日毎に教会に行き、気がつけば洗礼を受けることになっていました。

親子で六甲教会の十字架の道行にも参加しました。知らないうちに主の祈りを誦んじている母の姿に目頭が熱くなりました。受難の主日にはしゅろの枝が2本、復活徹夜祭の夜にはろうそくが2本。今まで1つだったものが、2つになりました。ご復活の喜びも倍になりました。何より、我が家に仲間がふえたことがこれほど頼もしいものかと驚いています。

突然の受洗のように見えますが、これはすべて神さまが時間をかけて準備されていたこと。そして、みなさまの日々のお祈りのおかげだと思えます。思い返せば自分自身の受洗もそうでした。祈りのちからをあらためて実感しました。感謝のうちに。(フランチェスカ)



|                                                                                                                                                                     |                                                                                                                                                 |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 教会報7月号の発行は、6月29日(日)です。<br>編集会議6月22日(日)です。<br>記事原稿は、6月15日(日)正午までに信徒会館<br>受付へご提出願います。(広報部)<br><a href="http://www.rokko-catholic.jp">http://www.rokko-catholic.jp</a> | カ ト リ ッ ク 六 甲 教 会<br>〒657-0061 神戸市灘区赤松町 3-1-21<br>電 話 0 7 8 - 8 5 1 - 2 8 4 6<br>F A X 0 7 8 - 8 5 1 - 9 0 2 3<br>発行責任者 アルフレド・セゴビア<br>編 集 広 報 部 |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|